

CINEMA INTERVIEW

ドキュメンタリー映画

珈琲とエンピツ

ろう者・難聴者を題材にしたドキュメンタリー映画を多く撮っている今村彩子監督の初の長編作「珈琲とエンピツ」(Studio AYA制作 配給)が大阪十三のシアターセブンで公開されている。ろう者のサーファー・太田辰郎さんを描いた作品で「言葉を超えたコミュニケーション」について話を聞いた。(高橋 聡)

「タイトルがとってもいい。静岡県湖西市でサーフショップ&ハワイアン雑貨店「Surt House Ota」を開いている太田辰郎さんは、サーファーでもあり、サーフボード作りの職人でもある。その太田さんに初めて会った時、とてもおいしいハワイのコーヒーを、ごちそうになった。店のお客さん全部に出すそう、コーヒーを飲みながら商談、雑談をする。聴者と話す時は筆談でエンピツを使う時が

気なサーファーおじさん。とても元気で明るい普通のおじさん。誰でも気軽に話をして笑顔が絶えない。この人がこんなに元気で明るいのはなぜだろう。素直にそう思って、感動した。12年ずっとろう者のドキュメンタリーを作ってきたいろいろな人を見てきたが、こんな人は初めて。私

「どれくらいカメラを回したのか。約一年半カメラを回して、あと半年で編集し69分の作品にまとめた。太田さんとお客さんの会話シーンだけでも70時間分撮った。太田さんはなぜそこまで心を開けるのか。心の変化の表れたシーンを編集で選んで使った。初めは奥さんや



「自分から距離をつくっていた」と話す今村彩子監督
大阪十三のシアターセブン

今村 彩子 監督

いまむらあやこ 1979年生まれ。名古屋出身。愛知教育大学卒業。在学中に米留学で映画を学ぶ。これまで12年間ろう者の映像作家としてドキュメンタリー映画を多数制作。CM「伝えたい」がギャラクシー賞選奨作品に。東日本大震災で被災地を訪れ現地のろう者の現状取材して「架け橋」を制作し全国各地で講演・上映活動を展開中。「珈琲とエンピツ」の上映時間の問い合わせは電話06(4862)7733、劇場へ。

人は「伝えたい」思いを持つ

「孤独」な気持ち制作のエネルギーにしてきたようなどころがあり、虚無感を覚えることも多い。この出会いはショックだった。

「映画にしたいと申し込んだ時の反応は？」

太田さんは私を見て最初「暗い」という印象を持たれたようで、「大丈夫?」「本当に映画になるの?」と心配された。太田さんがショップでいろんなお客さんと話をしているところから撮影を始めた。太田さんは誰に対しても同じように心を開いて迎え入れ、弾む会話のテンポも変わらない。それは太田さんの人柄。この人をもっと知りたい、そして他の人に紹介したいと強く思った。

「ろう者に出会って下さってお話もしていただいた。優しい。」

「奥さんと両親がとても優しい。」

「人間力」の秘密は家族にあると思った。両親は太田さんが17歳でサーファーを志願し、その後サーフショップを持つことやサーフボード職人になる夢をかなえるために頑張るのを心からサポートする。「彼は諦めなかった。それで応援できた」と。耳が聞こえな

「映画も家族が総出演して太田さんを応援。」

奥さんは「出るつもりはなかったのに、出すぎたのでカットして」って。(笑)息子さんがお父さんのことを「諦めなかったのがすごい」とたたえているのもうれしい。サーファーとして現役で、店を持つこと、ボード職人になることなどの夢を実現。太田さんの「言葉を超えたコミュニケーション」の力がそれをかなえたのかもしれない。

「今回の作品でナレーションも担当している。」

私の不完全な発音では批判されるかもしれないが、プロのナレーションでは自分の思いが伝わらないのではないかと思って、自分の声で自分が感じた心の変化を映像に取り込もうと決めた。押し付けるのではなく、あったかくてユーモアいっぱい太田さんの笑顔と人柄があふれた映画として見てほしいと思った。



太田辰郎さん(右)に話を聞く今村監督